

⑩ 『入門』

関ヶ原を過ぎ、名に聞こえた不破にさしかかった。愛発(あらち)鈴鹿と並んで、古代の三関と呼ばれた関所の跡は何も残っていないかった。

『人住まぬ不破の関屋の板ひさしあれにし後はただ秋の風』の古歌から想像はついていた。まして芭蕉翁がその古歌を踏まえて詠んだ『秋風や藪も阜も不破の関』の一句には、藪と畑しか見えない一面の原に、秋風だけが蕭々と吹き渡る様子が詠まれている。

何も残っていないくて当然なのだが、ミチの気持ちの中にも、ふっと小さな愛惜の風が吹き抜けたようだった。

少しの間立ち止まって周囲を見回したミチは、傘狂が住む美濃岩手を目前にして気持ちが急いだ。一、三の旅人が佇んでいるのは、やはり遙か昔の関所へ思いを巡らせているのだろう。

背なの荷物を一度ゆすつておいて胸の前でくくり直し、ミチははやる気持ちにせかさされるようにその人達の脇を通り過ぎた。

傘狂の家は、岩手城と竹中半兵衛が残した陣屋の五町ほど先だった。

竹中家の重臣である傘狂の屋敷は、長府のミチの家よりも随分構えが大きい。その玄関に立ったミチは、武者震いにも

似た緊張が体の中を駆け抜けるのを感じた。

利之助が亡くなって後、俳諧の旅に出る決心をして既に五年に近い年月が過ぎた。

その間、諾々と暮らした日は一日とて無い。全ての時間は、今日の為に有ったと言つてもよい。

そう思うと、御免下さいませ、と口に出かかった言葉が喉元でからまつてうまく出なかった。

一旦言葉を飲み込んで少し間をおくと、改めて胸を張りおとないを入れた。

その声が少し大き過ぎたような気がして思わず首をすくめた。

ミチの家で下働きをするのは年老いた五助一人だった。だけど、ミチの声に応じて姿を現したのは明らかに女中と思われる若い女だった。

家の格の違いを感じながら、萩からずっと一緒に旅を続けて来た竹奥舎其音の手紙を懐から取り出すと、用向きを伝えその手紙を手渡した。

実際はそれほど待たされた訳ではなかったが、先ほどの女中が再び姿を見せるまでの時間を落ち着かないばかりか、よほど長く感じたのは、やはり緊張の所為だったろう。

女中が提げている手水を見たミチの肩から力が抜けて、安堵がゆっくり背中を伝って降りてゆくのを感じた。

手水は家に上げてくれるし。目通りが叶ったのだ。

叶ったのであれば一時でも早く傘狂の顔を見たい。急いでワラジの紐を解き、足袋を脱ぐとあわただしく手水を使った。

長旅の足にひんやりと水の感触が心地良かった。

案内の女中に促されて座敷に入ると、傘狂は見台に落としていた目をあげてまじまじとミチの顔を見た。

「羽仁殿より手紙を頂戴していましたが、遠く長門の国から本当に来られるとは、いや驚きました。」とミチの来訪が信じられない様子だった。

髪にかなり白いものが目立つ。頬がそげて見えるのは面長の顔立ちのせいかも知れないが、額の深い皺がミチの父親よりもいく分年上であることを教えていた。

「明日、俳諧仲間の皆さんに集まってもらうことにします。中にはえらくうるさい方もいらっしやる。眼鏡に敵うといひですね。」

ミチは意外な言葉を聞いた気がした。傘狂に会っただけで事は済まないということなのだろうか。

五年近い年月をかけて今、やっとうして傘狂の前にいる。座敷に通されほっとしたばかりなのに、新たな不安がむっくりと起き上がった。

二日後の夕方、傘狂の座敷には、初老の女が三人、他には中年から老人まで、幅の広い層の男の俳諧師が十名近く集まっていた。

そこへ傘狂に従ってミチが入って行くと、雑談が急に止ん

で、おおっ、というどよめきにも似た驚きの声が上がった。

「はるばる長門から来られたと聞いたので、てっきり男の方だと思っていたが、意外や意外、若い女子さんではないですか。いやいやこれは驚いた」と一人の老俳諧師が声を上げた。

するとその言葉に同調するらしいざわめきが一瞬起こったところで傘狂が口を開いた。

「驚かれましたかな？使いの者に長門からの俳諧師を紹介したい、とだけしか言わせなかったのは、私と同じくらい皆さんにも驚いてもらいたかったもので」と、してやったり、といった笑みを浮かべて傘狂は懐に手を入れた。

ミチが持参した其音の手紙を取り出すと、回し読みするよう促しておいて続けた。

「今日は長門の菊車さんを交えて一巻を巻きましようかな」

傘狂が揚句をつけてその日の席が終わろうとした時、初めに驚きの声を上げた老俳諧師がミチに向かうと、菊車さんと断っておいて

おおとり ぎょうぎょうし

「大鳥の中とも知らず 行々子」

と書いた紙片を大声で読み上げながらミチに寄こした。

大鳥とは、永い間その世界に馴染んでそれなりの名を成し

た自分たち美濃の俳諧師を言うのだろう。その中に入り込んで来て恐れを知らぬ小ヨシキリがギョギョシ／＼と騒がしい、と言いたげだった。

少し考えたミチは

「揉まれて香る宇治の茶むしろ」と続けた。

大鳥の中でもまれる内に、今はヨシキリと同じ小鳥にすぎないけど、新しいムシロにも茶の香りが滲みていくように、やがて良い具合に香り始めることでしょう、と思いを込めた。すると今度は少し意地悪く

「つくたび／＼に汁かじわじわ」と更に大きな声で読み上げた。

この時はさすがに三人の女性俳諧師が、お互いの顔を見合わせ、又か、といった表情で顔をしかめた。

この老人は、多少下卑た話が好きなようだった。今日の座の中で最も若いミチは、尼とは言えまだ女の香りが消えていなかったのだろう。

それにしても、まるでこれは猥談ではないか、とミチは滅入りそうになった。だが、ここで負けてしまえば入門すら危うくなりそうに思えて腹をくくった。

猥談には猥談で返そう。

「山寺の鐘の撞木が生木なら」

鐘を衝く撞木が生木なら衝くたびに汁もでるだろうが、枯れ木の貴方ではどうにもならないだろう、との思いを返した。

ミチの句を聞いた傘狂が大きな声を立てて笑った。つられて三人の女性たちも、顔を俯き加減にして吹き出しそうな口を手で覆った。

男性の俳諧師達は、この老人に遠慮があるのか、複雑な表情で笑いをこらえていた。

流石に次に打つ手段を無くしたらしい老俳諧師は、煮詰まった顔を慥然とミチに向けると、まるで子供の喧嘩のように「長門なる菊車が顔は鬼瓦」と言った。

これに応えるミチの反応は早かった。もう遠慮はしなかった。まるでその言葉を待っていたかのように即座に返した。

「世の俳人は下に見るかな」。

顔は鬼瓦でも構わない。屋根の上から皆を見下ろしていると応えたのだ。

傘狂は前よりもっと大きな声で笑った。同時に今度は、他の者全員が手を叩かんばかりに笑い転げた。

老俳諧師だけが苦々しく顔をゆがめていたが

「参りましたな」と呟くと、一転して柔らかな笑顔をミチに向け

「以後お手柔らかに」としゃがれた声で言った。